

あるむぜお

府中市郷土の森だより

No.21

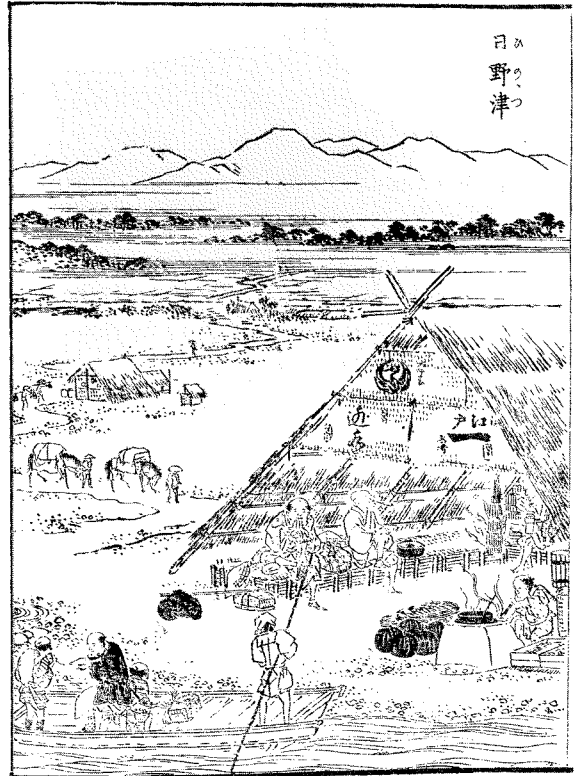
al museo

武蔵野の風景 6『江戸名所図会』より

日野津

甲州街道を府中宿を出て、谷保を過ぎるとやがて多摩川を渡ることになります。ここ日野津（日野の渡し）まで、江戸日本橋を出発しておよそ9里。多摩丘陵の低い山並を左手に見て、その手前を流れる多摩川の気配をいつも感じながらも、いよいよその川を越えるとなれば、江戸を離れ旅に出た思いをいっそう深くさせたことでしょう。

多摩川の鮎は古くから知られていました。府中から日野にかけての中流域では、夏から秋までの間、鮎漁がさかんに行われ、その新



鮮な鮎は江戸幕府に献上されたり、旅人に出されたりもしました。上の絵でも、旅人が寛ぐ茶店のよしずの陰に、鮎ザルに盛った鮎、ペンケイにさした鮎を見つけることができます。

日野津は、後北条氏の時代の小田原と川越を結ぶ往還にあたり、後には、武蔵野台地を斜めに横断して、日光御成街道の岩槻との間を直接つなぐルート of 基点にもなっていました。

写真は、現在の甲州街道（国道20号線）の日野橋を、その交通量緩和のため新しくつくられた立日橋から望んだところです。（〇）



企画展

みきのくち 神酒口

—岡村コレクションを中心に—

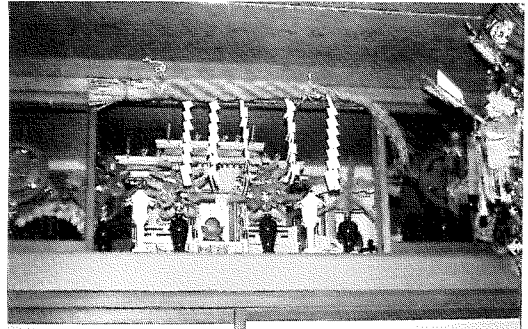
9月13日(日)～10月25日(日)

展示会案内

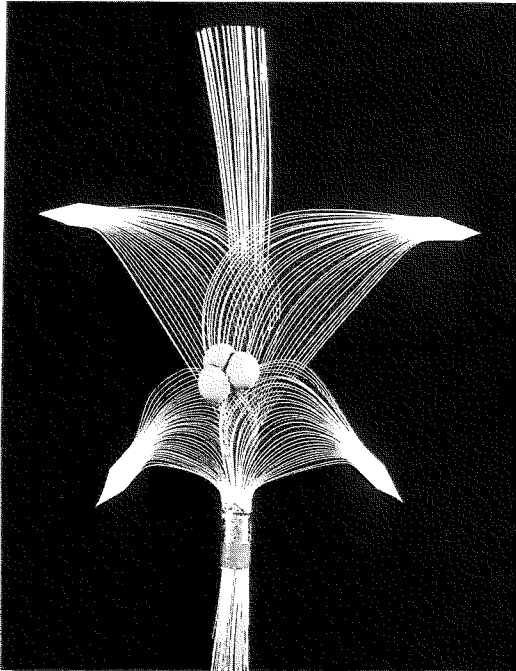
年の瀬もおしつまと、各家では新年を迎える準備であわただしくなります。各地に市が立ち、お正月用品を買い求める人でごった返します。府中でも毎年、大国魂神社境内で暮れの市が立ちますが、多くの店の中には、日用品に混じって、神酒口を売る店もみられます。

神酒口は、お正月の縁起物のお飾りですが、これは神様へのお供えとなります。お正月は歳神様の祭り、歳神様は正月様とも呼ばれます。つまり歳神様は、お正月にやってくる神様です。この歳神様を迎えるために、家々では恵方(歳神様が宿る方角)の向きに歳神棚を作り、歳神様を迎え、旧年の豊作と平穏を感謝し、あわせて今年の豊穰と平和を祈念するのです。この歳神棚には御神酒徳利に御神酒があげられ、その御神酒徳利に神酒口を挿して供えます。神酒口はこの歳神棚のほかに、神棚や荒神様、屋敷神にもあげられ、多い家では5か所ぐらい供えられました。

さて神酒口には、竹、経木(檜などの木材を紙のように削ったもの)、紙、板、真鍮のものがあありますが、なかでも竹の神酒口は多摩地区で数多くの種類が作られ、その造形の上でも出色の出来ばえをみせてくれます。その名前も「宝船」「茗荷」「橘」「万年青」など縁起のいいものや、「雀の子」「でんぐり返し」など可愛らしいものがあります。



このたびの企画展は、岡村吉右衛門氏から当館に寄託されている神酒口を中心とした展示会です。本来、神酒口は信仰の対象となるものですが、今回の展示会では素材を活かした造形の美を、竹の神酒口を中心に紹介しています。日本の造形、形に現われる日本人の美意識を感じとっていただければ幸いです。(G)



神酒口「万年青」

記念講演会「神酒口の美」

日時 10月4日(日)午後2時～4時
会場 本館大会議室
講師 岡村吉右衛門氏(工芸家)

次回予告

企画展

日食写真展

11月15日(日)～12月6日(日)

武蔵国府のはなし その2

—国府が府中に置かれた理由—

なぜ、府中に国府が置かれたのか。この問題には未だ明確な答えはありません。当時の武蔵国は、現在の埼玉県・東京都のほぼ全域と川崎市の全域、さらに横浜市の大半を含む広大なもので、21の郡からなっていました。府中はこのうちの多磨郡に位置し、武蔵国全体から見れば南に偏った所にあたります。

『日本書紀』の6世紀前半の記事には次のような説話があります。武蔵の豪族笠原使主あしはらと同族の小杵こきりは国造くにぞうの職を争い、小杵は上野かみ（群馬）の大豪族に、使主は朝廷に援助を求めました。朝廷から国造に任命された使主は、小杵を殺し、朝廷に横滄よこそう・橘花たちばな・多氷たまひ（多木か）たぎ・倉榎くらえの4か所を屯倉みやげとして献上したという話です。

国造というのは、朝廷が設置した地方官で、地方の有力な豪族が任命されました。また、屯倉とは、朝廷の直轄領のことです。

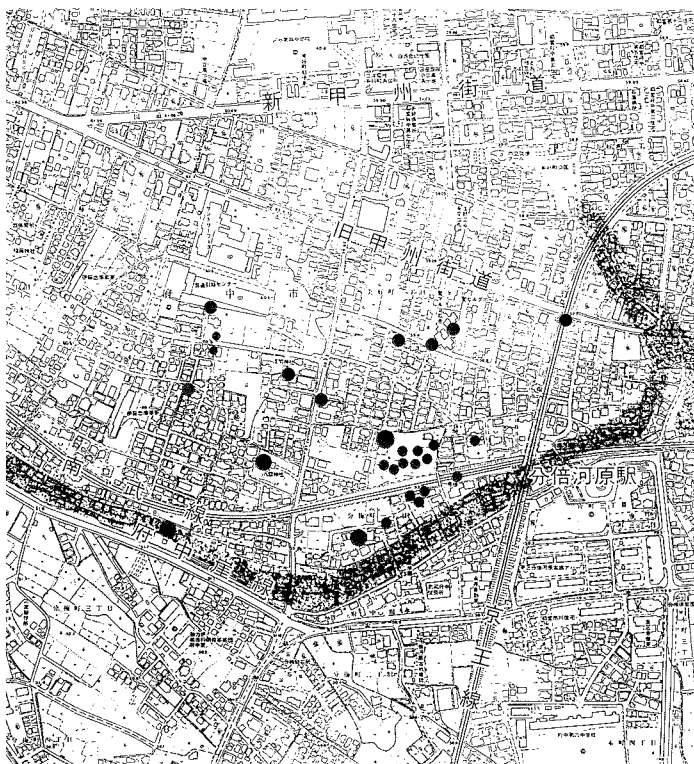
一般にこの頃の『日本書紀』の信憑性には問題があるのですが、この説話によって武蔵の大型古墳の消長が説明できるため、ある程度の史実を反映しているという指摘があります。こうした事件の詳細はともかく、6世紀前半頃に全国各地に屯倉が設置された可能性は高いといわれています。

4つの屯倉は、それぞれ埼玉県比企地方・川崎市・多摩地区・横浜市南部に当たります。したがって、国府は、朝廷直轄地の多い南武蔵の地が選ばれたと考えてよいでしょう。

では、南武蔵のなかで、府中を選んだ理由は？ これは、6～7世紀の古墳の分布と700年頃造られた各郡の役所の位置から推定できるのかも知れません。

しかし、武蔵国内の郡の役所跡は、ほとんど判明していません。肝腎かんじんの多磨郡の役所跡についても同様で、府中市内という説もありますが、ほかにも幾つかの推定地があるのが現状です。

こうした中で、最近、府中市内では古墳の発掘調査が進み、分倍河原ぶんばいがわら駅の西側には6～7世紀の古墳群があることがわかってきました。古墳といっても、国造のような大豪族の墓ではなく、直径30～40mほどの小さな円墳で、周辺地域を統括した一族たちのものでしょう。彼らに国府を誘致する程の勢力があったとはとうてい考えられませんが、大国魂神社東側の国府政庁推定地からそれ程遠くない所にこの時期の古墳群が存在することは重要です。さらに調査が進めば新たな手掛りを与えてくれるかも知れません。 (F)



高倉古墳群の分布

金属器をまねた土器

英 太郎

唐代の中国からは、実に多くの文化が日本に伝わってきました。いまでも正倉院に残る宝物からは、その一端を窺い知ることができます。

さて、東国とはいえ、国府が置かれた府中にも唐の文化・文物の影響はいろいろな形で伝わっていたようです。そんななかのひとつで、筆者が関心を持っているのが、今回、ここでご紹介する一個の土器の問題です。

常設展示室には、奈良～平安時代の武蔵国府関連遺跡から出土した多数の土器や瓦が展示されていますが、その一隅にこの土器が置かれています。青味がかつた灰色をした須恵器の碗で写真からもわかるように、一見、現代の丼物の容器のような風貌をしているものです

この土器は、かつて武蔵府中郵便局とその隣のパークハイム府中マンションの建設に先立って寿町で行われた発掘調査の際に、奈良時代の後半頃に属する1軒の竪穴住居址から他の土器類とともに出土したものです。

器の形に他の坏や碗にはない独特のおもしろい特徴があって、体部の中程、つまり碗の腰の部分に一段の突出した帯がめぐり、稜線のようになっています。そして、その稜より上が外側にラップのように反りかえるように開いて口縁部になっているのです。



市内出土の稜碗型土器（口径16.5cm、器高8.2cm）

こうした特徴をもつ土器は、普通、「稜碗型土器」と呼ばれていますが、この器形の土器は国府関連遺跡でもたいへん珍しく、報告されているものだけでも、市内でわずか4個しか類例がありません。旧武蔵国の範囲で筆者が調べた限りでは、府中以外では東京都内は武蔵国分寺関連遺跡、埼玉県では鶴ヶ島市の若葉台遺跡、日高市の大寺廃寺遺跡、鳩山町の鳩山窯跡群など数か所からみつかっているだけです。その一つ鳩山窯跡群は、武蔵国最大の須恵器の生産地であった南比企窯跡群の一角に位置し、府中で発掘された問題の土器も、使われた粘土の特徴からみてここで焼かれたものと考えられます。

これらを概観してみると、いずれもが奈良時代に属するものとみられ、その出土遺跡も事例は少ないながらも、当時の官衙（役所）か寺院に關係した遺跡である傾向があり、一般の集落とみられる遺跡からは出土しません。この「稜碗型土器」については平城京、長岡京などの宮都をはじめ全国的にも出土例があり、富山県（越中国）や兵庫県（播磨国）でも官衙に關連した遺跡からの出土傾向があるという指摘があります。おそらく、かなり限られた特殊な用途に使われた土器らしいのです。

ところで、この稜碗型の土器については、そのモデルとみられる金属器の稜碗が存在するのです。全く同じ器形的特徴を備えた銅製の碗が同時代の遺物にあり、須恵器の稜碗はこうした碗を模倣して製作されたものとみられます。その伝世品の代表格として法隆寺や正倉院に伝わる「佐波理碗」の名で呼ばれる銅碗類がありますが、これらの碗は須恵器の碗とたいへんよく似ていて、あるものについては大きさまでびつたりと一致することがわかっています。これらの銅製の稜碗は、奈良時代に寺院で仏前供養具として、また、僧侶の食器として使われたものではないかと推定されていますが、その他に



法隆寺に伝わる銅製稜鏡（口径17.9cm、器高6.9cm）
『昭和大修理完成記念法隆寺展目録』・小学館・1985より



韓国雁鴨池出土の銅製稜鏡（口径10.4cm、器高5.2cm）
韓国・国立中央博物館編・『雁鴨池』・通川文化社・1980より



中国西安市出土の銀製稜鏡（口径18.0cm、器高8.1cm）

中国・鎮江市博、陝西省博編・『唐代金銀器』・文物出版社・1985より
出土例も何例もあり、寺院の鎮壇具ちんだんぐや墳墓ふんぼの副葬品として埋納されたものなどもあります。ただし当時の記録によれば、身分が高い人たちの間では、こうした銅製の食器は実用品として好まれて使われていたことも明らかです。ですから、その用途のすべてを仏教関係の遺物と限定することはできません。いずれにしても、当時、金属器はたいへんに貴重なものでしたから、須恵器の稜鏡は銅製の稜鏡の役割を補う代用品として作られたことは疑いないと思われます。

さて、最後になりますが、この稜鏡について最も興味深い問題があります。

それは韓国・統一新羅時代しんらの金属器と陶器、中国・唐代の金属器、陶磁器、滑石器などに同じ器形があり、これが日本に影響を与えたのではないかと思われる節があることです。

韓国では、やや小振ですが日本の銅製稜鏡と



永泰公主墓出土の三彩稜鏡（口径13.7cm、器高7.4cm）

佐藤雅彦ほか・『世界陶磁全集11・隋唐』・小学館・1976より

非常によく似た鏡が、統一新羅の宮殿遺跡である雁鴨池遺跡ガンアウチから出土しています。日本の正倉院に伝わる稜鏡は付属した文書の分析により新羅製ではないかと推定されていますが、それを確かに裏付けるものといえるでしょう。また、唐代の長安の都の跡、現在の西安市内から出土した金銀器や、唐の永泰公主墓（AD.706埋葬）から出土した唐三彩にも全く稜鏡器形としか言いようのないものがあります。唐代には金銀器は皇帝や貴族の間での宴会の際に、贈答品をいれる最も高級な容器として、或いは贈答品そのものとして用いられたことが『安祿山事蹟』あんろくざんじせきなどから窺われます。なお唐三彩の碗については、その高貴な金銀器の形を模して副葬用の明器としたものと理解されています。

いずれにしても、こうした由来をもつ稜鏡型の須恵器が、府中では誰によって、どのように使われたのが興味は尽きないものがあります。

＝最近の発掘調査から＝

今回紹介するのは、発掘された鎌倉街道についてです。場所は美好町2丁目の都営住宅の現場でこの春調査が行われ、南北に延びる道路の跡が確認されたのです。

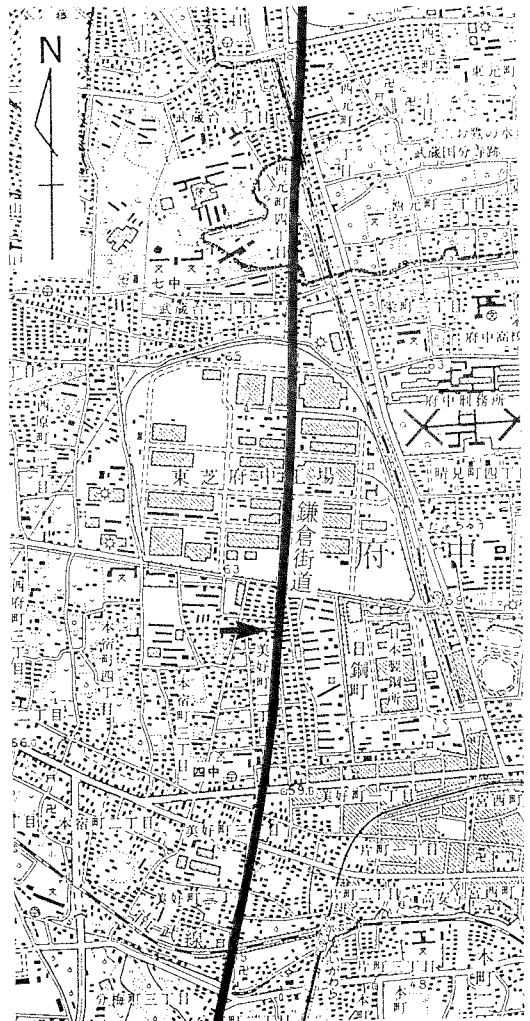
道路の幅は約9mを測り、両側に溝の掘られた立派なつくりをしています。道路の中央部分は人馬の往来により、小石混じりの黒土が堅く踏み固められ、所々が浅い溝のように窪んでしまっています。ちょうど今の舗装されていない砂利道の状態を想像されるとよいでしょう。

地図を広げてみると、調査地点の北の延長線上に、国分寺の旧鎌倉街道の跡といわれている崖線の切り通しに達することがわかります。また一方、南の延長線には分倍河原から関戸へ抜ける現在の鎌倉街道に通じる分栴通りの上に見事に重なることがわかります。このことから、上野国から武蔵府中を経由して鎌倉へ直行する中世の鎌倉往還、一般にいう鎌倉街道上つ道の一部ではないかとみられるのです。また、道路の規模をみても、幅の狭い踏み分け道ではなく、幅の広い計画的に造られた大道であることからわかります。上つ道(上道)は、元弘3(1333)年新田義貞が鎌倉攻略の時に鎌倉方が防御のために進んだ道としても有名で、軍政の面では東海道に次ぐ重要な道とされていました。

なお、今回発見された道路の東約200mには、古代の幹線道であった「東山道武蔵路」が平行して走っていましたが、府中がこのような交通の要衝になるのは、国府の時代以来武蔵国の中心的「都市」であったため当然のことといえましょう。

近年、各地でこのような古代から中世にかけての古道が次々に発掘調査によって明らかになっていますが、都市や集落(ムラ)だけが遺跡なのではなく、それらの点と点を線でつなぐ道路の跡も確かに地中に埋もれているのです。古道の発掘調査は、過去の交通史の復原のためにもたいへん重要な資料の一つなのです。

(都営美好町2丁目第5団地地区の調査から
中山)



カメラアングル



▲太陽ってなんでこんなに熱いんだい。
太陽観望会



◀縄文人の感覚ってわたしにとってもよく似ています。縄文土器を作ろう



▲履けるかどうかはともかく、ほくにだつて作れます。ワラ細工講座・草履作り



▲こんなだったら農薬まけばよかったの
に？ こめっこクラブ・田の草取り

あれこれ

草原の演奏家たち

秋の夜長、虫の声が草むらから響いてくると不思議と気持ちが安らいできます。この心地良い感覚、いわば虫たちの合唱に風情を感じとれるのは、日本人の特質と考えられるでしょう。日本人は、自然界の動物の声などを大脳左側の言語脳でとらえるといわれているからです。

さて、これらの合唱隊を構成する虫にはどんな種類がいるのでしょうか。鳴く虫はコオロギの仲間とキリギリスの仲間が大別されます。コオロギ類は草むらに限らず、繁華街や駅のホームにもツツシサセコオロギ、オカメコオロギといった種類が鳴き声を聞かせてくれます。そして芝地や低い草原ではエンマコオロギが美しい声を響かせ、府中においては特に多摩川の河原で、めつきり少なくなったとはいえカワラエンマコオロギなる特殊な種類も鳴いています。また、鳴く虫の代表種であるカンタン、クサヒバリ、スズムシ、マツムシ、カネタタキなどもコオロギの親類として存在します。キリギリス類は草原や低木が生えた場所に多く生息します。声に特徴があるのはハヤシノウマオイで、鳴き声からスイッチョンとも呼ばれている種類です。同様の場所にはガチャガチャと鳴くクツワムシや、チョンギースの鳴き声でお馴染みのキリギリスも合唱に加わっています。その他ツヨムシ、

クサギリ、ヤブギリなど、いくつかの種類も生息しますが、地味な鳴き声のせいあまり目立たないことが多いようです。種類によって減少してはいるものの、都市の中で精一杯がんばっているコオロギに比べ、キリギリスの仲間は生活の場である草原がなくなるにつれて数も少なくなっています。



私たちにとって情緒あふれる虫たちの声は、虫同士のいろいろな場面で役割を持っています。一般に観賞されているさえずり鳴き以外で、たとえばエンマコオロギでは、雄がなわばりを宣言する時、交

尾の前に雄が雌を誘惑する時、なわばりに現れた侵入者に対して威嚇する時で音の出方が異なります。キリギリス類に威嚇音を持つものは少ないようですが、エンマコオロギ同様の鳴き声のパターンを聞くことができます。他に、複数の雄が一匹の雌を争う時、あるいは一人言、あくびの音というもので知られているようですが、非常に稀な例だということです。

虫社会の中で使い分けられている合図や会話の音色を、いつの時代にも安らかに楽しめるように、周りの環境を大切に守っていきたいものです。 (N)

インフョ メーシヨシ

秋一郷土の森にはこんな花が咲きます

茅葺農家の庭先の水田では、イネがすっかり成長し、穂が伸び、白い小さな花が咲き、実がふくらんできました。傍らの畦に、お彼岸の頃、毎年忘れずに咲いてくれるのがマンジュシャゲ。

流れがあるハケの斜面には9~10月、ハギ、コスモスの可憐な花が咲き乱れます。

まいまい井戸のまわりを埋めつくす、黄色いツワブキの花も見逃せません。

ハギのほか、秋の七草に含まれるススキ、クズ、ナデシコ、キキョウも郷土の森では見られ

ます。

赤い実がきれいな、ナナカマド、ハナミズキ、ガズミも捜してみてください。

あるむぜお 第21号

al museo イタリア語
"博物館で" "博物館にて" の意
発行日 1992年9月20日
発行 府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921